

Title	アウグスティヌスの政治世界 (二・ 完)
Sub Title	Saint Augustine's conception of the political world (2, End)
Author	柴田, 平三郎(Shibata, Heizaburo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1981
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.54, No.12 (1981. 12) ,p.76- 99
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19811215-0076

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アウグスティヌスの政治世界(二・完)

柴田平三郎

- 一 はじめに
- 二 「神の国」(*civitas Dei*)と「地の国」(*civitas terrena*)
- 三 「世界」の創造……………以上・前号
- 四 「天使」の墮罪と「人間」の墮罪……………以下・本号
- 五 \wedge 現世 \vee の構造
- 六 むすび

四 「天使」の墮罪と「人間」の墮罪

以上、わたくしたちはアウグスティヌスの考えている \wedge 神による世界創造 \vee の枠組について見てきたわけであるが、問題の「神の国」(*civitas Dei*)と「地の国」(*civitas terrena*)は、一体、どのようにしてこの世界に出現するようになったのであろうか。

既にわたくしたちはこの二つの国の構成員が、天使と人間たちであつて、かれらのうちの「善き者」が「神の国」(*civitas*

Dei)を、「悪しき者」が「地の国」(*ciuitas terrena*)をそれぞれ構成していることを知っている。したがって、この世界における二つの国の起源を問うとき、まず問題となるのは当然のことながら、天使(*angelus*)である。

わたしは人がわたしに何を期待しているかを心得ているし、わたしの約束を忘れてもいないので、わたしたちの主にして王である神の助けに絶えず支えられながら、わたしの力の及ぶかぎり、この二つの国、すなわち地の国と天の国の起源、進展およびその終局について論じようと思う。この二つの国はこの移りゆく世においては、互いに絡み合い、混じり合っているのである。わたしは、まず、この二つの国の起源(*exordia*)が、二組の天使の相違(*diuersitas*)に由来することを示そうと思ふ。⁽⁴²⁾

この二組の天使の相違とはアウグスティヌスによれば、「一方はすべてに共通なあの善〔＝神〕に、そしてその神の永遠性と真理と愛に確固として留まつたのに対して、もう一方はあたかも自分自身が自分の善であるかのように考え、自分の力に自己満足してしまつている」⁽⁴³⁾天使の間の相違を指している。そして、こうした相違が「善き天使」(*bonus angelus*)と「悪き天使」(*malus angelus*)の二種類を産み出してしまつたのであるが、それは天使の本性(*natura, principium*)によるのではなく、その意志(*voluntas*)によるのである。⁽⁴⁴⁾というのは、元来、天使は他のすべての被造物と同様、神によつて「無から」(*ex nihilo*)その本性を善なるものとして造られていたからである。しかも、天使は自由意志(*liberum arbitrium*)を賦与された理性的被造物として他の被造物の上位に位置づけられていた。その自由意志によつて自己の創造主であり最高善である神に確固として留まるかぎり、天使には幸福な生活が約束されていた。しかるに、天使のなかのある者はこの自由意志を悪用し、みずからの本性に逆らつて墮落したのである。こうして、天使の間には、次のような二種類の集団が存在することになった。

……二つの天使の交わり(*societas*)が存在する。一方は神を享受し、もう一方は嬌慢にふくれ上がっている。一方については、「そ

の万軍よ、みな主をほめたたえよ」といわれるが、他方の頭は「もしあなたが、ひれ伏してわたしを拜むなら、これらのものを皆あなたにあげましょう」という。一方は神のために聖なる愛によつて燃え立つており、もう一方は自己増長のために汚れた愛によつて焼かれている。そして「神は高ぶる者をしりぞけ、へりくだる者に恵みを賜う」といわれるように、一方は天の天に住まい、もう一方はそこから投げ落とされて、天空のもつとも低い場所でもがいている。一方は光輝く敬虔のうちに平穩であり、もう一方は暗い欲望にうづいてる。一方は神の指図通りに穏やかに人を助け、正義をもつて人を罰するが、もう一方は傲慢から人を支配し傷つけようとする欲望に燃えている。一方は出来得るかぎり善行によつて神の善性に仕え、もう一方は望むかぎりの悪業を行なわないように神の力によつて抑えつけられている。一方はもう一方を嘲笑するが、それはその迫害によつて心ならずも恩恵を与えるからであり、もう一方は一方を羨望するが、それは一方が遍歴者を仲間を集めるからである。

したがつて、二つの天使の交わりは相反し対立している。一方はその本性と意志において善であり、もう一方は本性において善であるが意志において悪である⁽⁴⁵⁾。

こうした事情は人間(homo)の場合においてもほぼ同様である。では、二つの国は人間に即して見た場合、どのようにして発生したのだろうか。

人間に対して神は天使と動物との中間的な本性を与えた。もし人間が真の王である創造主に服従し、従順な態度で主の命令を遵守すれば、かれは天使の交わりに入り、死を通ることなしに永遠の淨福に達するであろう。しかし、かれが傲慢と不服従のうちにその自由意志(Libera voluntas)を悪用し、主である神に背くならば、かれは動物と同様に死に定められ、欲望の虜となり、死の後に永遠の罰へと運命づけられるであろう。神は人間を一人のひととして造つたが、それは人間が人間社会から離れて、たった一人で生きるべきであるということではなかつた。神の意図はもし人間たちが単に本性上の類似性によつてばかりでなく、同類の感情によつても相互に結びつけば、人間社会の統一と人間的共感の絆が生まれ、人間に家庭というものをもたらすであろうということであつた。こういうわけで、神が人間の同伴者となる女を造つたとき、かれはその女を男を造つたのと同じの方法で造らうとしたのではなかつた。そうではなく、神は女を男から造り、そして全人類は一人の人祖から殖え拡がつたのである⁽⁴⁶⁾。

ここにはつきりと予示されているように、神の不変にして永遠の意図によつてその本性を善なるものとして「無から」造られたはずの人間の世界のなかに、やがて邪悪な「地の国」(civitas terrena)が発生するようになるのはいうまでもなく、人祖の自由意志の悪用＝〈墮罪〉(lapsus)にほかならない。

本性の創造主であつて悪の創造主ではない神は人間を正しいものとして造られた。しかるに、人間はみずからの意志によつて墮落し、正当にも罰せられるものとなり、同じように、墮落し罰せられる子孫を生むに至つた。われわれはすべてあの一人のひとのなかにあり、われわれすべてがあの一のひとであつた。人間はその罪に先立つて、それから造られた女によつて罰に陥つた。それはわれわれ一人びとりが別々の個別的形態を分与されていたということではなく、われわれが生まれ出るべき種子的本性(natura seminalis)がすでに存在していたということである。それは罪によつて毀損され、死の綱目によつて縛りつけられ、正当にも罰せられたものとされているので、人間はそれ以外の状態で人間より生まれ出ることができなくなつているのである。このようにして、自由意志の悪用から一連の惨禍が起つた。根元から腐敗した木のように、原初から墮落した人類は神の恵みによつて解放された者たちを例外とすれば、次々と悲惨さを受け継ぎながら終わることのない第二の死の破滅へと至るのである。⁴⁷⁾

いまや、人間は人祖によつて犯された最初の罪＝〈原罪〉(peccatum originale)によつて果てしのない墮落への道を歩まねばならなくなつた。それは天使の場合と同様に、本来、善なるものとして造られたかれらの本性のゆえではなく、自己の被造性を忘却し、かえつてみずからが創造主たる神に成り上ろうとしたかれらの邪悪な意志＝「傲慢」(superbia)のなせる業である。

人類の始祖が公然たる不従順に陥る前に、すでにかれらの罰はひそかに始まつていた。悪しき意志が先行しないかぎりには、人は悪行を犯すには至らないものである。そして、傲慢(superbia)以外には、悪しき意志の始源として何があつただろうか。なぜなら、「傲慢はすべての罰の始めだ」からである。傲慢とは邪しまにも下から上に到達しようとする⁴⁸⁾ことで、魂がその唯一の源泉として固着すべき方を棄却し、いわばそれ自身を存在の源泉とすることである。

だが、もちろん、この人間の恥ずべき墮罪を全智全能の神が知らなかつたはずはない。神の不変にして永遠の見地からは、それは当然に予知 (*Præscientia*) されていたのである。

神は人間が罪を犯し、その結果死ぬべきものとなり、さらに死すべき定めを負うた子孫を生むであろうことをよく知っていた。またその罪はあまりにも法外であつて、水や陸から無数に創造された理性的意志をもたない動物でさえも、協和を尊ぶようにとただひとりの人から殖え加わつた人間よりも、いつそう安らかに、また平和的にそれぞれの同種のなかで生きている(「ように見える」ほどである。ライオンや竜でさえも、人間ほどにはかれら同士の間で戦わないのである。ところが、神は信仰深い民が神の恵みによつて嗣子として召され、聖霊による罪の赦しによつて義と宣せられ、最後の敵である死が滅ぼされる時、永遠の平和のなかに聖なる天使との交わりに加えらるるであろうことを予見しておられた。この民は神が多数のなかでの一致をいかに喜ばれるかを人間に示すため、人類をひとりの人から始められたという事実を十分に尊重するのである。⁽⁴⁹⁾

こうして、人間の世界に、「神の国」(*civitas Dei*) と「地の国」(*civitas terrena*) が存在することになつた。アウグステイヌスはそれを次のように語っている。

この巻(「第一二巻」)を閉じるにあつて、こう考える。初めに造られたこの最初のひとのなかに、たとえ確かな証左によつてではなく、神の予知によつてであるとしても、人類の来るべき二つの交わり (*societas*) ないし国 (*civitas*) が存在していた。なぜなら、このひとからこそそのちの人間「すべて」が現われたからである。ある者は断罪「を蒙る点」において悪しき天使と、ある者は酬い「を受ける点」において、善き天使と結ばれている。たとえ神のさばきは隠されていても、それは義しい。なぜならこう書かれている。「主のすべての道は……いつくしみであり、まことである」。そのいつくしみは不義であるはずがないし、その義が苛酷であるはずはないからである。⁽⁵⁰⁾

ここに至つて、ようやく、わたくしたちは「天使の交わりが二つ、人間の交わりが二つ、全部で四つの国 (*civitas*) があるのではなく、ただ天使であろうが人間であろうが、善き者からなる国と悪しき者からなる国の、二つの国があるのだ」と語つていたアウグスティヌスの言葉の意味する地点に辿りついたことになるといえよう。

五 △現世▽の構造

さて、このようにして、神への裏切り＝自由意思の悪用による墮罪の結果、発生した「神の国」(*civitas Dei*)と「地の国」(*civitas terrena*)——「善き天使と善き人間の交わり」(*societas*)と「悪しき天使と悪しき人間の交わり」——は上述しておいたように、現実の歴史世界——かれの言葉では、△現世▽(*saeculum*)——において、互いに絡み合い、混じり合いながら、分離されることなく、「最後の審判」まで存続していく、というのがアウグスティヌスの基本的な世界認識であった。ところで、この場合、もちろん、かれにおいては、この二つの国のうちで、その力点は「神の国」(*civitas Dei*)に置かれていることはいちうまでもない。そして、わたくしたちにとつてもつとも問題とすべきそのうちの人間の方はといえば、それはこの地上では(*in hoc saeculo*)、「遍歴者・巡礼者・寄留者」(*peregrinus*)であるところなのである。

神の国 (*civitas Dei*) はそれが人類 (*hominum genus*) から成るが、⁽⁵¹⁾ ぎりで、この世の国のなかで遍歴 (*peregrinus*) してゐる。

この、「神の国」(*civitas Dei*)の現世における遍歴 (*peregrinatio*) というモチーフそれ自体はよく知られているように、ユダヤキリスト教的伝統に深く根ざしたものであり、ことにアウグスティヌスに先立つパウロ (St. Paulus, 2—C. 64) によつてすでに強烈に説かれていた。⁽⁵²⁾ そして、その伝統をアウグスティヌスは古代世界の崩壊期という大いなる歴史の節目に結節点において改めて確固たるものにさせようと決意したのである。『神国論』全巻を力強く貫くものは実にこのモチーフであり、それは第一巻の冒頭「序」(*praefatio*)において真正面から据えられている。

いと高き栄光の神の国 (*Gloriosissimam civitatem Dei*) は、この移り行く時の流れのなかにあつては (*in hoc temporum cursu*)、信仰によつて生かす (*ex fide vivens*)、不信心者の間で (*cum inter impios*) 遍歴してゐる (*peregrinatur*) が、他方、それはかの

揺るぎない永遠の座に (*in illa stabilitate sedis aeternae*) 確固として立つている。神の国はこの永遠の座をいまは (*nunc*) 忍耐して待ち望んでいるが、それは正義 (*iustitia*) が裁き (*iudicium*) に交えられるまでである。それ以後 (*deinceps*)、神の国はこの永遠の座を最後の勝利 (*victoria ultima*) と完全な平和 (*pax perfecta*) とのうちに獲得するであらう。

このように、アウグステイヌスは地上における「神の国」(*civitas Dei*) の遍歴を力説したあとで、さらにつづけて、かれ自身、「神の国」の位相に立ちつつ、「地の国」(*civitas terrena*) を激しく告発している。

わが愛する子、マルケリヌスよ、わたしはいま着手するこの書物のなかでこの神の国について論じ、その建設者よりも自分たちの神のほうを選び取る者たちに対抗して、これを弁護することを企てた。これによつて、わたしはきみへの約束を果たすこととなる。これは実に大きな、困難な仕事 (*magnum opus et arduum*) である。しかし「神はわれらの助け主である」。

実際わたしは、謙虚の徳 (*virtus humilitatis*) がどんなに大きいかを高慢 (*superbia*) な者たちに納得させるために、どれだけ多くの力が必要であるかを知っている。神の高貴さは、人間の厚かましさが奪い取つた高貴さとはちがつて、時の変化と共に動揺することのあらゆる高さ (*acumina*) を越えているが、そこに至るのは謙虚の徳によつてなのである。というのも、わたしたちが論じることを決意した、この国の王にして建設者「なる神」は、その民の書物「聖書」のなかで、次のように言つて神の律法の定めを啓示されたからである。「神は高慢な者たちに立ち向かいたもうが、謙虚な者たちには恵みを与えたもう」。この定めは神にのみ属することであるが、高慢の思いにふくれ上がった「悪」靈までがこれを自分のものにしてしようとして、次の言葉で自分が賞賛されることを好んでいる。

「服従する者たちをゆるし、高慢な者たちをうち倒す」

こういうわけで、支配の熱望にかられて人民を奴隸として仕えさせながら、自らはその支配欲 (*libido dominandi*) によつて支配されている地の国 (*civitas terrena*) についても、わたしは沈黙することはできず、この書物の目的に必要な限り、また力の与えられる限り、論じることにした。

ここに見られるアウグステイヌスの決意表明は確かに、以後の『神国論』全巻の論述の骨格を形成しており、したがつて、この箇所に被漚されている「神の国」(*civitas Dei*) と「地の国」(*civitas terrena*) の関係の構造分析を通じて、『神国

論』の思想の全体を占うことは充分に可能である。⁵³⁾だが、そうであるとしても、それでは、アウグスティヌスは単に一方的に「神の国」(*ciuitas Dei*)の位相に立つことによつて、たとえそこに数多くの苦難と試練が待ち受けているとしても、究極的には「地の国」(*ciuitas terrena*)が打倒されるのが△歴史▽の一貫した筋道なのだ、と主張しているだけなのだろうか。あるいは、言葉をかえていえば、わたくしたちがこれまで見てきた、世界と歴史についてのアウグスティヌスの見方はきわめて図式的であり、初めから結果の分かつてしまつてしまつている目的論的歴史観にすぎない、ということになつてしまふのだろうか。

アウグスティヌスにとつて、わたくしたち人間がそのなかで生き、苦しみそして死んでいくこの現実の世俗世界△△現世▽▽(*saeculum*)はしかしながら、決してそのようなア・プリオリな視点からのみ捉えられて終わりとされているのではない。かれは確かに一方において、この世を、恥知らずにも創造主たる神を裏切つた墮罪の人間——それをかれはしばしば「永遠の罰に定められた塊」(*massa damnata*)と呼ぶ——の支配する邪悪な領域として激しく告発している。「神の国は、この移り行く時の流れのなかにあつては、信仰によつて生きつつ、不信心者の間で遍歴している」という、上述の言葉自体、この世(*saeculum*)がかれにとつては、否定的に評価されていることを逆証明するものであろう。しかし、かれの△現世▽▽(*saeculum*)観をつつさに検討してみると、わたくしたちはかれがそれを決して単純な眼で捉えているわけではないことに気づく。というよりはむしろ、この現実の世俗世界は神ならぬわたくしたち生身の人間にとつて、果してどこまで正確に認識することのできる対象でありうるのか、という問題こそが実はアウグスティヌスの最大の難問であつたといつた方がよいかもされない。

神の知識(*scientia Dei*)は、将来・過去・現在がそれぞれ別のものであるかのごとくに、変動することは決してない。神がわたしたちのように、将来を望見し、現在を見、あるいは過去を振り返るといふことはない。神はわたしたちの思考(*nostrorum cogitationum*)

consuetudo)とはきわめて異なつた方法で、将来・現在・過去を見られるのである。神が見られるのは、これからあれへの思惟の変化によつてではなく、全く不変的にである。それゆゑに、時間的に生起することは、将来であれ、現在であれ、また過去であれ、すべては神の変ることなき永遠の現在 (*stabiliti ac sempiterna praesentia*) のなかで把握される。また、神にあつては、ある事物を肉眼により、他は精神によつて把握することもない。神は魂と肉体とから成らず、また「今」とか「かつて」とか「これから」ということもない。神の知識はわたしたちのように、現在・過去・将来という三つの時を含まず、移り変わるものではない。⁽⁵³⁾

とすれば、「この世にあつては (*in hoc saeculo*)、神の国 (*civitas Dei*) と地の国 (*civitas terrena*) は互いに絡み合ひ、混じり合つて進み、その状態は最後の審判 (*iudicium ultimum*) において両者が分離されるまで続く」と、かれが語るほかならぬ。《現世》 (*saeculum*) は、神ではありえぬわたくしたち人間にとつては、むしろ不可知の領域として映ることになる、といつてよいであらう。そして、この場合、ここには、二つの内容上の特質があると考えられる。

一つは、そこにおけるこの二つの国の対立が決して単純な図式で捉えられているわけではない、ということである。

確かに、「神の国」 (*civitas Dei*) と「地の国」 (*civitas terrena*) は既に見たように、「信仰と不信仰」、「善と悪」、「神への愛と自己愛」、「謙遜と傲慢」といつた、まったく相対立する原理から成り立つて⁽⁵⁶⁾いる。この対立はまことに熾烈であり、ここでは少しの妥協も入り込む余地はないように思われる。⁽⁵⁷⁾しかしながら、現実の人間世界 (*saeculum*) においては、この対立的な原理に依拠する二つの国は誰の眼から見ても、そのようなものとして、明瞭に分離された形で対立しつゝ、存在しているわけでは決してないのである。そうした明確な区別が可能な世界がかりに存在するとしたら、さしずめそれは天使 (*angelus*) の世界と悪魔 (*diabolus*) の世界であらう。

善き天使の交わりから、悪魔が新たに現われ出ることはないし、悪魔が善き天使の交わりに再帰することもない、ということを知らないカトリック信者がいるであらうか。⁽⁵⁸⁾

しかも、再三にわたつて指摘しているように、この二つの国のうち、「神の国」(civitas Dei)は人間に関する限り、地上では巡礼者として遍歴するのであるが、この遍歴という言葉のなかには、当然のことながら、この「神の国」が邪悪な現実世界と否応なく、関係せざるをえない、という含意があるように思われる。そして、このことを念頭に入れつつ、次のような一節を読むと、わたくしたちはかれの《現世》(saeculum) 観の複雑性の意味をはつきりと感得することができる。

この国「神の国」は、敵対者たちのなかにさへ、将来その民となる者たちが隠れていることを心にとめるべきである。また彼らと対立するときにも、彼らが信仰を告白するに至るまではその敵意に耐えることを無意味なことだと考えてはならない。同様に、神の国はこの世に寄留〔遍歴〕している限り (quandiu peregrinatur in mundo)、その所屬する「民の」数のなかには、サクラメント〔秘跡〕の交わりにあずかりながらも、聖徒たちの受ける永遠の嗣業を将来共にすることのない者たちが含まれているのである。彼らの一部は隠れているが、他の一部はあらわである。彼らは神のサクラメントを受けているのに、神に敵対する者たちと共につづやくことをためらわない。そしてあるときは敵対者たちと共に劇場を満たし、またあるときはわたしたちと共に教会堂を満たすのである。

しかしながら、きわめて明らかな反抗者たちのなかにも、たとえ彼ら自身は知らないとしても、わたしたちの友となるように予定された者たちが隠れているとすれば、まして今述べたような者たちが矯正されることに絶望してはならない。たしかに、最後の審判が分けるまでは、これら二つの国は、この世のなかにあつては (in hoc saeculo) 互いに絡み合い、混じり合つているのである。⁽⁵⁹⁾

さらに、次の一節にも、注目したい。

それゆえ、教会 (ecclesia) が、現在低められることによつて将来高くされる備えをし、また恐れに苦しめられ、悲しみに悩まされ、労苦に打ちひしがれ、誘惑の危険にさらされつつ鍛えられて、真に喜ぶ時と言えはただ希望によつてのみ喜ぶような、この邪悪な世 (in hoc saeculo maligno) の、悪しき時代にあつては (in his diebus malis) 多くのしりぞけられる者たちが善き人びとと混在し、両者はいわば福音の網によつて集められているのである。この世においては (in hoc mundo) ちようど海のなかと同じように、海岸にたどり着くまで、両者は無差別に網のなかに囲まれて泳いでいる。そこに着けば、悪しき者たちは善き人びとから分けられ、善き人

びとの間では、ちようどその宮におけると同じように、「神がすべての者にあつて、すべてとなる」。そこで、わたしたちは、詩篇において、「わたしは告げ、『彼らは数え切れないほど多くなる』と言つた」と語つたかたの言葉が、今や成就したのである。キリストが、初めはその先駆者ヨハネの口を通して、それから彼自身の口を通して、「悔改めよ、天国は近づいたからである」と語つて以来、このことは現在起つているのである。⁽⁶⁰⁾

これらの文章においては、「神の国」(*ciuitas Dei*)は現実の「教会」(*ecclesia*)と同一視され、その同一視のなかで、現在、「教会」を構成している人間たちすべてが必ずしも救いを予定された、善き人びとはかぎらず、そのなかには、悪人も隠れていること、そしてまた逆に、現在、「教会」と敵対している人びとのなかにも、将来救われる人がいるということ、それゆえ、「現在」の時点からではなく、「将来」という時間的スパンで考えた場合、誰がこの国の真の住人になるかは、人間には分からない、という視点が打ち出されている。ただこの場合、もちろん、アウグスティヌスの真の思想においては、地上の、可視的な教会がただちに「神の国」(*ciuitas Dei*)そのものであるわけではないことはかれが当の「神の国」をこの世(*saeculum*)においては遍歴(*peregrinus*)している⁽⁶¹⁾と語つたり、あるいは「地の国」(*ciuitas terrena*)も同様に、「神秘的に」(*mystice*)かつ「聖書にしたがつて」(*secundum scripturas nostras*)⁽⁶²⁾そう呼ぶのだ⁽⁶³⁾と述べていることから既に充ち明らかである。したがつて、ここで確認すべきは、再び繰返すことになるが、かれがいうこの世における(*in hoc saeculo*)「神の国」(*ciuitas Dei*)と「地の国」(*ciuitas terrena*)の対立という図式はそれをあくまでもわたたくしたち人間の問題として受けとめるとき、天使と悪魔の対立関係とは根本的に異なつた、きわめて複雑な様相と意味を内在させているという点でなければならないのである。

そして、この二つの国の対立関係の複雑性、錯綜性と絡み合つて、わたたくしたちはさらにかれの描く《現世》(*saeculum*)の概念のもう一つの特徴を見いだすことができる。すなわち、それはいま見てきた、この二つの国の対立をそもそもそのな

かに抱え込んである当の梓組^{II}△現世▽が一体、いつまで続き、いつ終末を迎えることになるのか、いいかえれば、「最後の審判」(iudicium ultimum)はいつ訪れるのか、ということもまた人間にとつては根本的に不可知の出来事として考えられているということである。たとえば、このことは世の終末に先立つ最後の大迫害がいつであるか、は誰にも示されていないという指摘からある程度窺えよう。

たしかに、あの反キリストによつてなされる最後の迫害 (notissima persecutio) は、イエス自身が自ら来臨することによつて消滅させるであろう。なぜなら、「主イエスは」この者を口の息をもつて殺し、来臨の輝きによつて滅すであろう」と書かれているからである。それについては、いつそれは起こるのかとよく問われる。まつたく見当外れの問いである。もしそれを知ることがわたしたちにとつて益となるならば、弟子たちがたずねたときに、師である神自身以上によく答えられるかたがいただらうか。じつさい、彼らは師とともにいたときそれについて黙していたわけではなく、直接彼に向かつて、「主よ、あなたがイスラエルの国を復興なさるの、この時なのでですか」と尋ねたのである。しかし、彼は、「父がご自分の権能によつて定めた時を知るのは、あなたがたのすることではない」と答えた。彼らは時間や日や年についてではなく、時期についてたずねたのであるが、その時この答を受けたのである。したがつて、この世に残されている年数を数えたり、限つたりするのは無駄である。それを知るのはわたしたちのすることではないと、真理「キリスト」の口から聞いているからである。⁽⁶²⁾

あるいはまた、かれが世界史の各時代を一日と数え、その最後の時代(第六日目)の長さは数えることができない、と述べている例もその証拠とならう。

聖書の行なつている時代区分にしたがつて、各時代を一日と数えるならば、安息日は第七の時代と考えられるだらう。第一の時代、つまり第一日はアダムから大洪水までである。そこからアブラハムまでは第二日である。経過した年の数は等しくないが、おのおの一年と考えられる世代の数では同じである。そこからは、使徒マタイの示すように、キリストの来臨までの三つの時代が経過する。おのおのは一四代であるが、第一はアブラハムからダビデまで、第二はダビデからバビロニア捕囚まで、第三はこの捕囚からキリストの

肉における来臨までである。ここまで計五つの時代になる。第六の時代はまさに現在、過ぎつつあるが、その年代の長さは数えることができない。というのは、「時期や場合は、父がご自分の権威によつて定めておられるのであつて、あなたがたの知る限りではない」と記されているからである。この第六の時代が過ぎ去ると、神はいわば第七日目に休まれるであろう。そして、第七日の安息であるわたしたちも神にあつてやすらうことになるであらう。⁽⁶³⁾

これらの言葉によつて、アウグスティヌスのいう「現世」(saeculum) がわたくしたち人間には、時間的にも、果していつまで続くものであるか判然としない世界であることが容易に分かるであらう。だが、それらにもまして決定的なのは、それがこの世の歴史に関していわゆる「千年王国論」(millenarism, chiliasm) を否定していることである。

どこにであらうとも、二種類の人びと、すなわち善人と悪人の存在するところでは、教会はいまあるように存在する。しかし、善人ばかり存在するところでは、教会は存在はするであらうが、そのなかにひとりも悪しき人がないときのようになるであらう。それゆえに、今でも教会はキリストの王国、また天国である。(Ergo et nunc ecclesia regnum Christi est regnumque coelorum)。聖徒はいまでもすでにキリストとともに世を治めているが、まだ終わりの時のようにはない。毒麦(zizania) は麦(triticum) と並んで教会のなかで成長するけれども、キリストとともに治めることはない。⁽⁶⁴⁾

周知のように、千年王国論とはキリストが再臨したのち、地上にメシア王国を建設し、最後の審判に先立つ二千年の間、そこを統治するであらうとする、当時、主として根無し草的な貧民階級の間で熱狂的に唱えられていた説であり、「ヨハネ黙示録」(二〇・四一六)をその典拠としている。このようなラディカルな教説が教会史のなかで、あるいはもつと広く古代史一般のなかで、どのような社会的意味をもち、それを否定するアウグスティヌスの役割が少なくとも客観的にはどのような影響力と結果を及ぼすものであつたか、といった諸問題についてはひとまず措いておきたい。⁽⁶⁵⁾ いま、大事なことはむしろ、両者には「現世」(saeculum) に対する決定的に異なつた見方があつたということであり、その相違こそが両者の思想を大き

く隔絶させる溝にほかならなかつたといふことの確認である。いいかえれば、∧世の終わりに千年王国がこの地上にやつてくる！∨という教説を熱烈に信奉する人びとの意識の内部には、いま、ある現実世界に対する徹底的な侮蔑の感情が脈打っている。つまり、かれらにとつては、この世とは悪魔と悪魔に操られた人間たちの支配する邪悪な世界以外のなにもでもなく、そこにおいて、自分たちは一方的に苦しめられている。したがつて、こうした現在の世界は時間的にも空間的にもトータルに否定されねばならない。しかも、その場合、このトータルに否定された現在の先にある未来の到来を、かれらは千年王国がこの地上に忽然と実現されると熱狂的に説くことによつて、きわめて切迫したものと受けとる。それゆえ、この意味においては、この世の歴史は自分たちにとつて不可知なもののどころではなく、あえてそいひきれば、自分たちの知力によつて確実に知りうるもの、掴みとりうるものと考えられているといつてよい。おそらく、こう考へる千年王国論者たちにあつては、同一の思想・主義・信条によつて一つに堅く結ばれている自分たちこそは圧倒的に「正しい人間」であり、現在、自分たちに敵対している「悪しき人間」たちと自分たちとの明らさまな対立関係は決して変わることもなく、それはあの輝かしい千年王国の到来において初めて、前者が完全に根絶させられるまで絶対的に固定化されているのである。

これに対し、同じく∧現世∨(saeculum)の邪悪性を激しく糾弾しながらも、アウグスティヌスはそれを単なる否定の對象とは考へていない。確かに、この世は自己の被造性を忘却し神を裏切つたあの人祖の∧墮罪∨以来、もはや決定的に、「自己愛に取り憑れた、肉によつて生きる救われざる者の集団」∥「地の国」(civitas terrena)の支配する世界になり下つてしまつた。そこでは、人間の圧倒的多数はこの悪しき国に属している。しかしながら、ここにはまた、たとへ少数ではあつても、「神への愛に燃えた、靈によつて生きる救われた者の国」∥「神の国」(civitas Dei)が巡礼者として遍歴するといふ形をとるとはいへ、確固として含み込まれているのだ。それはかりではない。かれにおいては、ほかならぬこの「神の国」(civitas Dei)のなかにさえ、それがこの地上では遍歴者であるかぎりには、神の永遠の祝福に与からない者もいるので

あり、他方、「地の国」(*civitas terrena*)のなかにさえ、救いを予定された者が隠れている。いいかえれば、アウグスティヌスが説いている、この世における二つの国の対立とは誰の眼にも歴然とそのように分かる対立では決してなく、果して、誰が各々の国の住人であるかは人間には判別できないのである。それが判別できるのはひとり神のみであり、人間に明らかになれるときはといえ、それはいつ到来するか人間には分らぬあの「最後の審判」(*iudicium ultimum*)においてであることはいうまでもない。

とすれば、このような▲現世▼(*saeculum*)に対する徹底的な不可論の立場に立つアウグスティヌスにとつて、「千年王国論」は到底承服し難いものと思われたことはもはや明らかであるといわなければならない。かれが上述のように、「毒麦」(*zizania*)の譬を借用しつつ、「それゆえ、今でも教会はキリストの王国、また天国である」(*Ergo et nunc ecclesia regnum christi est regnumque coelorum*)と語つたのはもちろんそれによつて、「地上の可視的な教会」がそのまま、ただちに、「神の国」(*civitas Dei*)にはかならないということを強弁しようとしたのではない。そうではなく、この汚れに充ちた現実世界のなかで、自分たちだけは一切の罪から完璧に免がれていると自負し、そして自分たち以外のすべての他者存在を正しくない者と一方的に敵視することを通して、現実をトータルに否定するだけでなく、その先に千年王国の地上における出現を熱狂的に説くことによつて、神のみが知りえている未来までも、人間にとつて予知可能な領域に取り込もうとする矯慢な意識構造を叩くことこそかれの眼目だつたのである。

いずれにせよ、このように見てくれば、アウグスティヌスが「この世においては (*in hoc saeculo*)、二つの国は互いに絡み合い、混じり合いながら、分離されることなく、最後の審判まで存続していく」と語つたその世界認識——▲現世▼(*saeculum*)、観——の構造的意味はほほ明らかになつたといえるであろう。実際、かれは一人の信仰者としては、『神の国』(*civitas Dei*)はこの世において遍歴(*peregrinus*)する」という言葉に全面的に依拠していれば、それで良かったかもしれ

ない。しかし、かれにとつては、それは当、面、かれ自身のキリスト者としての生き方、方、ないし姿勢の問題以上のものとはなりえなかつたことは既にわたくしたちが見てきた通りである。そして、そのことを了解した地点に立つとき、では八世界Vはわたくしたち人間にとつて、どのように見えてくるのだろうか。それはアウグスティヌスによれば、たとえば次のような不条理といつてよい風景として、わたくしたちの眼前の拡がることになるのである。

善人が貧しく、悪人が豊かであるのは、いつたいどのような神の定めによるものなのか。わたくしたちの目にはその破廉恥な生活のゆえに滅びが正当である、と思われような者が幸せに暮らし、反対に賞賛に値する生活のゆえに幸福な生を送つてもふしぎではない、と思われる者が悲惨な暮らしをしているのはなぜか。あるいは罪なき者が報復を果たすどころか、裁判官の不正や偽証人の虚言によつて罪ありとされて法廷を去り、反対に罪ある相手の方は罰せられないどころか、有利な判決に勝ち誇るというようなことが起こるのはなぜか——わたくしたちにはわからない。さらにまた、悪人がすぐれた健康を喜びとし、反対に善人が病に蝕まれる。強壯な若者が強盗をなりわいとするようになるかと思うと、言葉でさえ他人を傷つけたことのない者が、子供のころからいろいろの病いに責められる。社会にとつて有用な人材が突然に早死したり、生まれなかつた方が良かったと思われような者が老齢まで生き延びる。さまざまの犯罪を重ねた者に榮譽が与えられるかと思うと、何の責められるところのない者が忘れ去られる——こうしたことがどうして起こりうるのか、少しも明らかではない。このような不則さをだれが洩れなく教え上げ、表にできるだろうか。⁶⁷⁾

六　む　す　び

以上、わたくしたちはアウグスティヌスにおける《現世》(saeculum)の構造を問題としてきた。その結果、かれの脳裡にある、この世界とその行く末についてのイメージは通常考えられているような、最初から結果の歴然としている目的論的歴史観に規定されたものとはかりはいえないことがある程度明らかになつたであらう。ただもちろん、ここで大雑把に扱われた問題の一つ一つはそのどれを取つて見ても、少なからぬ問題性を秘めており、単にキリスト教思想史のうえだけでな

く、広く思想史一般のなかで重要な意味と影響力を発揮してもいる。わたくしたちはその事実を決して軽視しえないし、その一つ一つを丹念に追究していくことが今後のわたくし自身の課題であることも知っている。

だが、冒頭にも指摘しておいたように、本稿の直接的な課題はひとえにかれが△世界▽をどう捉えたか、というその大きな枠組をまず問題にすることであった。この枠組をきちんとおさえておくことなしに、『神国論』の個々の政治発言を讀んでいくと、思わぬ陥穽に足をすくわれかねないことは既に指摘しておいた通りである。

さて、これまで見てきたように、アウグスティヌスは△世界▽を *saeculum* として捉え、そこでは「神の国」(*ciuitas Dei*)と「地の国」(*ciuitas terrena*)とが互いに絡み合い、混じり合いながら、分離されることなく、「最後の審判」(*iudicium ultimum*)まで存続していく、と考えている。ところで、この場合 *saeculum* とはこれも既に指摘しておいたように、同じ△世界▽を表象する言葉ではあつても *mundus* (これは「空間的世界」を指す)とは異なつて、一定の限られた「時間的世界」を指しており、本来的に「時代」とか「世紀」という意味を内包している。本稿では、△現世▽という訳語をあてはめているわけであるが、いずれにせよ、このことからかれが世界を基本的には超越——永遠といいかえてもよい——的な視点から見ていることが窺えよう。そして、それはかれがなによりも人間の現実世界を「アダムの墮罪」から始まつた邪悪な時代と見なし、そこから救われることが人間の根本課題であると考えていた以上、至極当然であるといわねばならない。いいかえれば、わたくしたちがふつうの意味で「世界史」と呼んでいるものはアウグスティヌスにあつてはそれで完結されるものでは決してない。それはあくまでも「前史」——世界創造、人間の創造およびその墮罪——と「後史」——最後の審判および「神の国」の最終的勝利——との間にはさまれた、「中間時」としての「世俗史」であり、「救済史」なのである。したがつて、そこに意味があるのは、ひとえにそこで神による墮罪した人類の教育と救済が行なわれると考えられるからである。かれは『神国論』の最終巻最終章で、「罪を犯すことも犯さないこともできたアダムの自由」と「もはや罪

を犯しえない選ばれた人の自由」とを鮮烈に対比させている。⁽⁶⁹⁾「この二つの極の間に、墮落し贖罪されて、キリストの恩寵によつて次第に解放されてゆく人類の歴史がある」⁽⁷⁰⁾わけであるが、その人類が究極的に求めねばならぬ目標は「もはや罪を犯しえない自由」の支配する国＝「神の国」(*ciuitas Dei*)であることはいうまでもない。

終つひなることなきかの国 (*regnum, cuius nullus est finis*) へ到達すること以外には、いつたい何がわたしたちの目標であろうか。⁽⁷¹⁾

このように、∧世界∨を見据えるかれの眼が基本的には、現世、超越的な視野をもつていことはいささかの疑問も許さぬところであろう。と同時に、しかしながら、かれはまた∧世界∨を単にそうした超越的な視野のうちに捉えて終わりとしていたわけでは決してない。

いと高き栄光の神の国は、この移り行く時の流れのなかにあつては、信仰によつて生きつつ、不信心者の間で遍歴しているが、他方、それはかの揺るぎない永遠の座に確固として立つている。神の国はこの永遠の座をいま (*nunc*) は忍耐して待ち望んでいるが、それは正義が裁きに変えられるまでである。それ以後 (*deinceps*)、神の国はこの永遠の座を最後の勝利と完全な平和とのうちに獲得するであろう。

既に引用した『神国論』第一巻の昌頭〔序〕*praefatio*〕の言葉だが、ここには、明らかに、「神の国」(*ciuitas Dei*)が二つの領域にまたがつて重層的に存在している、という認識が打ち出されている。すなわち、それは一方では、「この移り行く時の流れのなかに」(*in hoc temporum cursu*)遍歴している。しかし、それはまたもう一方では、「かの揺るぎなき永遠の座に」(*in illa stabilitate sedis aeternae*) 確固として立つているのである。この二つの領域は「いま」(*nunc*)と「それ以後」(*deinceps*)という時間軸でいいかえられるが、要するに、それは「時間」的世界と「永遠」(*aeterna*)とをそれぞれ意味しているわけである。ところで、ここで問題なのは既に充分見てきたように、この「永遠」の到来、つまり「裁き」＝「最後の審判」が行なわれ、「神の国がこの永遠の座を最後の勝利と完全な平和とのうちに獲得するであろう」ときが、一

体、何時訪れるか、人間には、皆目、見当が「つかないということである。」しかも。

確かに、最後の審判が分けるまでは、これら二つの国は、この世の中にあつては (*in hoc saeculo*)、互いに絡み合い、混じり合っているのである。

と述べたかれの言葉の意味は、この世 = ▲現世▼ (*saeculum*) においては、「神の国」 (*civitas Dei*) と「地の国」 (*civitas terrena*) の対立という図式が決して誰の眼にもそのように歴然としているのではなく、かえつて天使でもなく悪魔でもない人間には、根本的に判別できない性格をもっている、ということであつた。とすれば、▲世界▼を見据えるアウグスティヌスの眼には当然、現世内、在的な視野もまた存在することは明らかであろう。確かに、かれにとつては、「神の国」 (*civitas Dei*)こそがつねに第一義であり、それがそこに一部含み込まれているかぎりにおいて、この世 = ▲現世▼ (*saeculum*) がかれの思考世界に入つてきたといういい方は可能ではあろう。そして、ここでは、先程見たように、*nunc* [現在]——*deinceps* [将来]という時間軸がかれの思考を展開させていることも事実である。しかしながら、再三指摘しているように、*deinceps* が人間には不可知であると見なされる以上、わたくしたち人間が生きるこの現実の歴史世界 (*saeculum*) は単なる、無意味な、束の間の *nunc* としてだけ捉えられてよしとされるわけには到底いかないことになる。否むしろ、この世があつたべき墮罪によつて汚された邪悪な世界であるとしても、そこにはまた「神の国」 (*civitas Dei*) が厳然と存在するのであり、しかも「地の国」 (*civitas terrena*) のなかにも将来、救いを予定された人間が隠れているのである。だとすれば、この二つの国を大きく包み込んでいる状況世界は単に「永遠」の到来までの、一時的な「時間」——*nunc*——としてだけではなく、確実に「神の国」 (*civitas Dei*) が根を下ろす——たとえ異邦人として遍歴するとはいえ——「空間」——*hic*——としても捉えられていることになる。アウグスティヌスが限られた時間的世界を意味する *saeculum* という言葉だけではなく、空間的世界を意味する *mundus* という用語をも併わせて用いていることはこうした意味であろう。

以上を要約していえば、アウグスティヌスは「世界」を現世超越的に捉えるとともに、現世内面的にも捉えるという、いわば複眼的かつ重層的な見方をもつていたといえる。かれは「神の国」(civitas Dei)の完全な到来が *deinceps* に属するという点では「現世」(saeculum)にのみ埋没した見方は断じてとらなかつた。しかし他方、かれはまた「神の国」(civitas Dei)は「永遠」(aeterna)の位相で捉えられるだけであり、この世はそれとはまったく無縁な、罪を帯びた、空しい場所にすぎない、などとは決して考えていない。かれにおいては、「ここぞ、いま」(hic et nunc)既に「神の国」(civitas Dei)は一部実現しているのである。それゆえ、この「現世」(saeculum)はかれにとつて、あくまでも「超越」的な視野において捉えられねばならないが、しかもなお、そのうえで、一定の枠内において「内在」的に捉えられねばならないと考えられていることはや明らかであろう。⁽⁷²⁾

さて、このように、「世界」を凝視するアウグスティヌスの眼が基本的に複眼的かつ重層的構造から成り立っていることをわたくしたちは確認してきた。かれはこの複眼的かつ重層的な眼でもつて、人間には不条理としか映りようのないこの現実世界を見る。もちろん、一人の確信をもつたキリスト者として、かれは世界が神によつて造られたこと、それゆえこの被造世界は究極的には整然とした秩序をもっており、たとえそこに神の不在を思わせるかのような悲惨と苦しみが現出しても、それは神が人間に与える試練であることを信じて疑わない。⁽⁷⁴⁾だが、そうした神の隠れた意図にもかかわらず、神ならぬ生身の人間たちにとつては、かれらの棲息する「現世」(saeculum)とは、何と不可解な不条理に満ち溢れた世界であることだろうか。こうした世界に必然的に伴わざるをえない権力や国家や政治に対して、かれはときに仮借のない批判を加え、ときにそれらを肯定しさえもする。『神国論』のなかに散見される政治発言は、しばしば一見・相矛盾するかのような印象を読む者に与えることは否定できない。だが、果して、それらは本当に矛盾しているのだろうか。わたくしはこれからそうしたかれの発言を取り上げ、そこから、一つの統一した「政治思想」を析出する作業を開始するつもりであるが、そのとき、本

稿で見えてきたかれの《現世》(saeculum)観の構造の確認はその作業に光を当てる照明燈となるはずである。

- (42) *De civitate Dei*, X, 1.
- (43) *Ibid.*, XII, 1.
- (44) *Ibid.*, XII, 1.
- (45) *Ibid.*, XI, 33.
- (46) *Ibid.*, XII, 22.
- (47) *Ibid.*, XII, 14. アウグスティヌスは死を、人間の罪に対する神の罰——*poena peccati*——と見なす。かれは人間を魂(*anima*)と肉体(*corpus*)とから成るものとするが、後者の死が「第一の死」(*mors prima*)であり、前者の死が「第二の死」(*mors secunda*)である。そして、この場合「第二の死」こそ最悪のものとなる。「第一の肉体の死については、善人にとっては望ましく、悪人にとってはわきわいであるといふことができる。しかし第二の死は善人には起こらないので、なにびとにとつても望ましくない」(XII)。「わたしたちの贖い主の恵みによつて、少なくとも第二の死を避けることは可能である。これは他の死よりも深刻で、あらゆる悪の中で最悪である。なぜならば、第二の死で起こるのは魂と肉体の分離ではなく、両者【第一と第二の死】が永遠の形罰へと結びつけられることである」(XII, 11).
- (48) *Ibid.*, XII, 13.
- (49) *Ibid.*, XII, 23. XII, 11.
- (50) *Ibid.*, XII, 28. cf. XII, 1.
- (51) *De civitas Dei*, XVII, 1. ちなみに、天使の場合には遍歴しない、とアウグスティヌスはいつている。「彼ら【聖なる天使】はこの国【聖なる国】の大部分を構成し、しかも彼らは決して遍歴することがないので、それだけいつそう幸福である」(XII, 9).
- (52) たとえば、「アブル人への手紙」の著者は次のようにいう。「これらの人はみな、信仰をいだいて死んだ。まだ約束のものは受けていなかったが、はるかにそれを望み見て喜び、そして、地上は旅人であり、寄留者であることを、自ら言いあらわした。そう言いあらわすことによつて、彼らがあることを求めていることを示している」(「アブル人への手紙」一一・一三—一四)。また、パウロはこういつている。「わたしたちの国籍は天にある。そこから、救主、主イエス・キリストのこられるのを、わたしたちは待ち望んでいる」(「ピリピ人への手紙」三・二〇)。それゆえ、アウグスティヌスも既に「告白」のなかで、死せる母モニカのために祈りつつ、次のようにいつているのである。「彼らが敬虔な愛情をもつて、この移りゆく光のもとにおいては私の両親であり、母なるカトリック教会においてはあなたを父とする私の兄弟であり、永遠のイエルサレムにおいては私と同市民であるこの二人のことを、想い起こしてくるようだ。あなたの民はそこを出てからそこにもどる日まで、遍歴しつつこのイエルサレムをあえぎもとめてくるのです」(Confessiones, XI, 13. 以下)。この「遍歴者」(*peregrinus*)という概念は古代イラスラエルの *gerim* やギリシアの *metoicoi*, *periticoi*, *palatcoi* などと同様に政治的には市民権をもたない一つの社会層を意味しており、経済的・社会的にも疎外された存在をも意味している。そして、そのようにある国家——

アウグスティヌスの時代においては、もちろん「ローマ帝国」を指す——のなかで、市民権を奪われて、「異邦人」(*peregrinus*)として暮らしているという状態そのものが宗教的な統一性を証明するものと考えられたといえよう。詳しくは、R. H. Barrow, *op. cit.*, pp. 141—142. 内田芳明 前掲書 三六一頁。マックス・ウェーバー 内田芳明訳『古代ユダヤ教 I』みすず書房 一九六二年。戸削達『ローマ帝国の国家と社会』岩波書店 一九六四年。

(33) R. H. Barrow, *op. cit.*, pp. 136—147. 内田芳明 前掲書 三三三—三三五頁。

(34) *De civitate Dei*, X V, 1. cf. X II, 1, 3, 7. X II, 30.

(35) *ibid.*, X, 21.

(36) アウグスティヌスはさらにまた二つの国を聖書にしたがって、「榮光の器」(*vas in honorem*)と「蔑々の器」(*vas in contumeliam*)と呼びだす(X V, 1)。「憐みの器」(*vas misericordiae*)と「怒りの器」(*vas irae*)と呼ぶ(X V, 2, 21)。

(57) とはいえ、もちろん、アウグスティヌスにおけるこうした二元論的傾向とはマニ教——周知のように、マニ教は世界を善と悪とから成るものと考えた——のようなそれでは決してない。この点について、念のため、長くなるが、石原謙博士の言葉を引用しておきたい。「神国論」に看過することのできない二元論的傾向の著しいというのは何を意味するか。この書が『神の国』を主題としながら、実は神の国と地の国との対立を前提とし、神とサタン、善と悪、義と罪、救いと滅び、光明と暗黒、楽園と地獄、生命と死、この反対的概念が終始対照して相対し終ることなく戦って最後審判に至っている。この対立概念は歴史的現象のみならず、人間の内的生活の中にも潜在し、神への敬虔と反逆、徳と罪、愛と憎、親和と争闘、彼の語で言えば *amor dei* と *amor sui*、*humilitas* と *superbia* と、*Caritas* と *concupiscentia* との対照を到るところで経験し、そこに常に両『キヴィターヌス』の争闘を見た。しかも彼はこの戦いが単に表面的な不一致不和に留まらず、根源的原理的な矛盾に基づくものであるのを感じ、一方には神の善に起因する『神の国』と、他方にはこれに反逆する悪魔の支配する『地の国』との世界的格闘であることを理解した。そのため彼に取つて戦いは時間的な歴史的現象という表面的な出来事たるに止まらず、形而上学的な存在の論理的矛盾に因する決定的破壊として考えられ、根源的の二元論に帰す。これがある批評家の論ずるようにマニ教から学んだ思想を完全に克服し切れなかつた残滓と言えるかどうかは確かめられないが、形式上マニ教的世界観との類比を想わしめられるのは自然である。けれども彼は最も根本的な動機においてマニ教と異なり、絶対的悪の、神に對立する二元的對立を認めず、否、悪は彼によれば新プラトニズムにおけることく、絶対的に存在しないので単に『善の欠存』(*privatio boni*)であり、むしろ善に転用されることができるとし、そのために存在を可能とされるとさえ考えられた(XI, 22.その他。X V, 3f.の興味ある説明によればすべて道徳的な罪悪の原因は肉ではなく、肉によつて影響された *anima* である。罪、少なくとも最初に行なわれた罪の原因は、肉の可變的狀態すなわち可變性に存したが、この死そのことは罪ではなく、むしろ罪の結果としての刑罰であるとし、次章に人は神に従つて生きなければならぬのに (*secundum Deum vivendum fuit*) '自己に従つて (*secundum se ipsum*) すなわち『人間に従つて生きる』ので、真理から離れて虚偽に陥り、そのため悪が始まり、二つの『キヴィターヌス』の對立の原因が成立すると語っている。それは『肉』と呼ばれる自然が悪また罪の原因ではなく、悪はむしろ自然を傷け害すること (*coarruptio naturae, contra naturam*) に存し、何らの実体を有せず、ただ人のこれを使用する心構え、結局意志の問題であることを示している。もし然りとすればアウグ

スティヌスの本書が全体として二元論的世界観の前提の上に立つと言つても、それは形式上のことで、實質的にはその立場はすでに彼自身によつて克服をされてゐるのである。石原謙 前掲書 五一—五五頁。なおまた、アウグスティヌスの基本的な一元論については、前註(33)も参照。

- (85) *De civitate Dei*, X, 13.
- (86) *ibid.*, I, 35.
- (87) *ibid.*, XIII, 49.
- (88) 「神の国」(*civitas Dei*)と「教会」(*ecclesia*)との関係については、Yves M. J. Congar, “*Civitas Dei et Ecclesia*,” *chez saint Augustin*”, *Revue des études augustiniennes*, vol. III, 1957, pp. 1—14.
- (89) *De civitate Dei*, XVII, 53.
- (90) *ibid.*, XIII, 30. 以上のように、地上における人類の歴史を六つに時代区分してゐるほか、アウグスティヌスはそれをまた、人間の成長になぞらえて、六つの年齢層に区分してゐる。(一) 幼年期 (*infantia*) (二) 少年期 (*puentia*) (三) 青年期 (*adulescentia*) (四) 成年期 (*iuventus*) (五) 壮年期 (*gravitas*) (六) 老年期 (*senectus*)。この時代区分は「神国論」では完成をせず、初めの三つの時代だけ、そのように語られてゐる (*De civitate Dei*, XI, 43)。右に掲げた区分は他の著作からのものである。De *diversis quaestionibus* [XXXIII]: *De vera religione*; *De Genesi contra Manichaeos*. アウグスティヌスの時代区分については、Paul Anichambault, “The Ages of Man and The Ages of the World”, *Revue des études augustiniennes*, vol. 12, pp. 193—228. R. A. Markus, *op. cit.*, pp. 1—21. Gerhart B. Ladner, *op. cit.*, pp. 222—238. 松田禎二「人類の歴史と終末——アウグスティヌス『神国論』の一考察」(『聖トマス学院論叢』一九七七年)。カール・レーヴィヤー 前掲『世界史と救済史』二二六頁。
- (91) *De civitate Dei*, XI, 9.
- (92) アウグスティヌスと千年王国論の関係をめぐる諸問題については、そもそもかれのいう「神の国」(*civitas Dei*)なる概念とは一体、何なのか、を考ふる議論のなかで改めて取り上げるつもりである。ここでは、容易に参照しうる文献を掲げるにとどめて置く。Oscar Halecki, *The Millennium of Europe*, University of Notre Dame Press, 1963. Ernest Lee Tuveson, *Millennium and Utopia: A Study in the Background of the Idea of Progress*, Harper Torch Books, 1964 (First published in 1949). アンリ・フォション 神沢栄三訳『至福千年』みすず書房 一九七一年。ノーマン・コーン 江河徹訳『千年王国の追求』紀伊国屋書店 一九七八年。マンハイム 鈴木二郎訳『イデオロギーとユートピア』未来社 一九六八年。青木保『千年王国論』(『中央公論』一九七〇年二月号—三月号)。
- (93) 周知のように、毒妻の譬はイエスが群衆に向つて話したいくつかの譬話の一つである。「マタイによる福音書」一三・二四—三〇、三六—四三。
- (94) *De civitate Dei*, XX, 2.
- (95) アウグスティヌスはこういつてゐる。「神の民に関するかぎり、人類の経験は個人の経験と比較することができる。個人の生活の連続的段階を通じてと同様に、人類の歴史の各時期を通じて、人類を地上的なものや可視的なものから永遠的なものや不可視なものに對する理解へと高めることを意図し

た、教育 (*eruditio*) の過程がそこにはあるのだ。』 *ibid.*, X, 14.

(69) *ibid.*, XII, 30.

(70) アンリ・ロンデ「アウグスティヌスの神学における自由と恩寵」(前掲『聖アウグスチヌス研究』所収) 二一三頁。

(71) *De civitate Dei*, XII, 30.

(72) このように、アウグスティヌスのなかには、現実世界に対してそれを超越的に見る立場と肯定(内在)的に見る立場とが併存していることの指摘と、それがやがて現世的事物に対する二様の評価——否定と肯定——へとつながることになる指摘とについて、わたくしは高橋亘氏とJ・N・フィッギスに大いに学んでいることを断つておきたい。高橋亘「聖アウグスティヌスの歴史観」(『伝統と創造』上智大学出版部 一九六三年) および「アウグスチヌス『神国論』の現代的意義」(『中世思想』XV一九七二年)——いずれも、『アウグスチヌスと第一三世紀の思想』創文社 一九八〇年 に収録され J. N. Figgis, *op. cit.*, p. 67,

(73) 前註(32)を参照。

(74) たとは、かれは世の禍福が善人にも悪人にも等しく振りかかえることを指摘しつつ、しかし、そこには次のような意味の相違があるのだと説いている。「このようなわけで、善人も悪人も等しく苦しむのであるが、両者ともに苦しみを受けるということでは相違はないとしても、そのゆえに両者の間に何の相違もないということはない。というのは、苦しみは似ていても、苦しむ者は似ていないし、また同じ苦痛の下に置かれても、徳と悪徳とは同じではないからである。実際、同じ火によつても金は赤く輝くのに、薬は煙を出し、同じ打穀車によつて糞しべは砕かれるのに、穀粒は分かれ出るのである。また、压榨器の同じ力によつて搾り出されるとしても、そのために油と油粕とが混合することはない。同様に、同じ不幸の衝撃が善人をためし、清め、選別するのに、悪人を罰して、混乱させ、絶滅するのである。この理由で、同じ苦しみの中にあつても悪人は神を厭いかつ汚すが、善人は神に祈りかつ讚美するのである。したがつて問題は、どんな苦しみを苦しむかということではなくて、どんな人が苦しむか、ということである。なぜなら、同じ動作によるにせよ、汚物をかき廻せば嫌な臭がするのに、「香料をかき廻せば」芳香を発するからである。』 *De civitate Dei*, I, 8